

乳児の eye-to-eye contact に関する一研究

遠藤由里

問題

近年、発達心理学の領域において乳児期の諸問題に関心が集まってきている。一方、臨床心理学や小児医学の分野においても、障害児の早期発見・早期治療・早期療育、の必要性及びにその効果が強調されている。

さて、自閉児の成因については、初期の心因説、環境説は否定され、現在では生得的な何らかの障害に基づいているのではないかと考えられている。その原因については様々な考え方が提示されているが、主症状については一定のコンセンサスに達していると考えられる(Kanner, L, 1943; Asperger, H, 1944; Rendle-Short, J, 1971; Ornitz, E. M. 1974; など)。しかし、これらは年齢に応じた臨床像の整理が不十分である。これを補うために、年齢段階を加味して症状を整理したものが, Call, J. D. (1977) である。彼によると、①生後1か月まで: eye contact がなく、哺乳時に holding position および予期姿勢をとらない、②2～3か月: 人の顔や声に無関心であやしても反応せず、遊んだり抱いたりすることや着脱衣に対する予期行動をとらない。③3～4か月: 社会的微笑が出現せず、遊びの中に入れず、視線を避け、抱きにくい。④4～6か月: 人に対する無関心と過度の rocking があり、無表情としかめ面がある。生後6か月までの症状を抜き出し記述した。ここで生後1か月という早期において eye contact の欠如が指摘されていることは興味深い。平井(1967)においても、3～4か月で視線が合わないことが記されている。

ここでは自閉児の最も初期の症状の一つである eye-to-eye contact の持つ意味を探るため、乳児の eye-to-eye contact に焦点を絞ることとする。

一般に人間の乳児は人間の顔に対して生得的な好みを持っている (Fantz, R. L. 1958, 1961, 1967, 1971, 高橋1973など) ことが知られている。一方自閉児は、非人間(動物)の顔よりも人間の顔図形に対してより多くの視線回避 (gaze-aversion) をひき起こすことが示されている (Hutt & Ounsted, 1966, 1970)。

では、eye-to-eye contact の持つ発達の意味は何なのであろうか。乳児の微笑や eye-to-eye contact が母親の行動の解放子となっているのではないか (Ambro-

se, J. A. 1961, Wolff, P, H. 1963, Robson, K. S. 1967) と示唆している研究もある。乳児の eye contact について初めて実験的に研究したものに Bloom, K. (1974, 1975) の研究がある。けれども結果的には顔における眼の有無が乳児に与える影響について調べたことになり、eye-to-eye contact それ自体は取り扱われていない。

eye-to-eye contact が母子関係の形成に与える影響の重要性が指摘されているが、eye-to-eye contact を直接取り扱った研究はまだない。

目的

実験 I の目的: 3か月児が eye-to-eye contact と gaze-aversion との相違を弁別できるかどうかを検討する。

実験 II の目的: eye-to-eye contact と gaze-aversion に対する乳児の反応の相違を横断的に検討する。

実験 I

方法: 被験児は3か月児10名。gaze-aversion 条件(GZ 条件と略す)と eye-to-eye contact 条件 (EC 条件と略す)との2条件を、GZ, EC, GZの順で乳児に提示する。GZ 条件では、実験者は乳児と face-to-face ポジションをとるが視線は一貫して逸らしている。一方 EC 条件では、実験者は乳児と face-to-face かつ eye-to-eye contact を体験する。乳児の関心を惹くために全条件を通して、乳児の発声のために実験者は発声模倣で応えた。記録は録音式行動記録器を用い、乳児の微笑、実験者の顔への注視が観察者によって測定され、発声がテープレコーダーに録音された。

結果: 結果は図1・2に示す通りである。

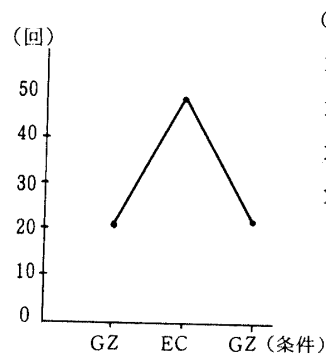


図1 実験 I の微笑数

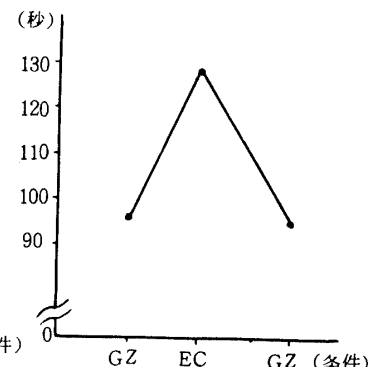


図2 実験 I の総注視時間

実験Ⅱ

方法：被験児は、3か月児9名、5か月児7名、7か月児6名、9か月児6名の計28名。手続きは、被験児をEC群とGZ群とに分け、Bloom, K. (1974)の研究に準じて条件づけの手法が用いられた。即ち、ベースライン、条件づけ（乳児の発声に対して発声模倣による即時随伴強化を与える）、消去の3セッションが実施された。EC群は3セッションとも face-to-face かつ eye-to-eye contact であり、GZ群は face to-face だが gaze-aversion であった。測度は実験Ⅰ同様、微笑、注視、発声（泣き）である。

結果：結果は図3・4・5及び表1に示した。

表1 泣き反応を示した被験者数
(実験Ⅱ)

群	月齢	3	5	7	9
E C		0	1	2	0
G Z		0	2	3	1

考察

実験Ⅰ、実験Ⅱの結果から以下のことが言える。

①同一被験児に eye-to-eye contact と gaze-aversion との2条件を示した結果、3か月児は eye-to-eye contact と gaze-aversion との弁別が可能であることがわかった。

② eye-to-eye contact が成立していると、3か月児はより多く微笑し、また顔への注視量も増加することがわかった。一方、GZ条件であっても3か月児は微笑もある程度し、また注視量も少なくないことから、gaze-aversion に対してネガティブな反応を示すことはなかった。

③年齢による変化（3・5・7・9か月児）をみると、微笑については一貫してEC群>GZ群であった。月齢にかかわらず、eye-to-eye contact が成立していると乳児はよりポジティブに反応することがわかった。

④注視については、GZ群では3か月児が注視量が多く、5か月には減少し、以後横バイ状態を示している。一方EC群にはそのような傾向はなかった。

⑤3か月児では、泣き反応を示した被験児はいなかったが、5か月・7か月になるとその数が増し、9か月では減少する。泣き反応を示した被験者数はGZ群>EC群であった。5か月以降、gaze-aversion に対するネガティブな反応が表われてくると考えられる。

⑥発声についてみると、条件づけの効果は示されていない。

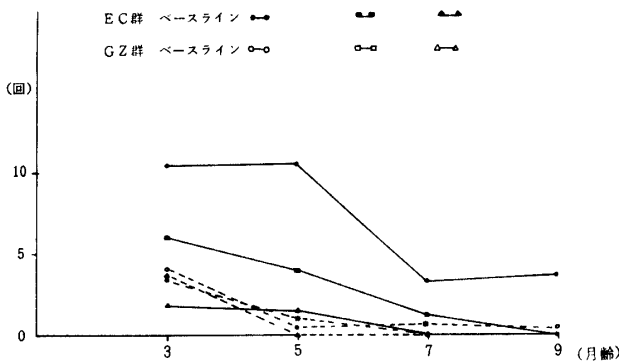


図3 実験Ⅱの微笑数

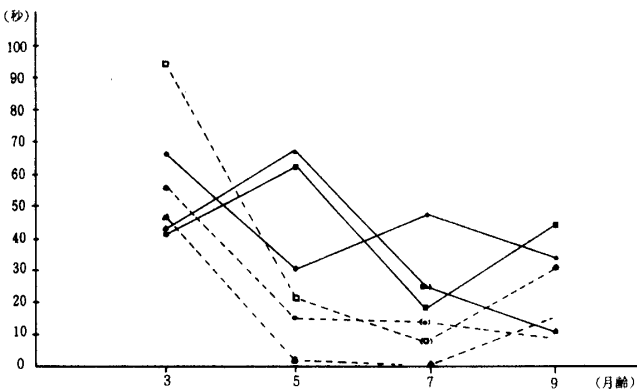


図4 実験Ⅱの総注視時間

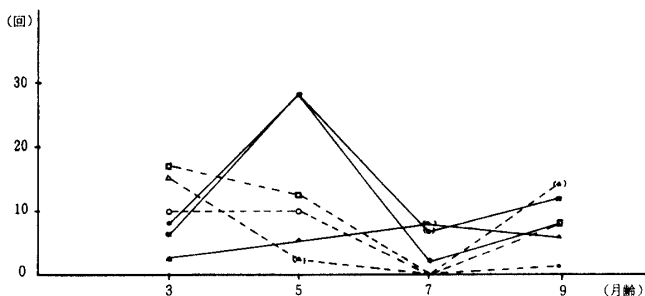


図5 実験Ⅱの発声数